

大学図書館における学修活動の可能性

The Possibility of Learning Activities in a University Library

若杉亮平*¹、飯野昌子*²

要旨

大学教育の中で学生協働やピアサポートといった、教職員以外に学生が学生の活動をサポートする流れがある。北陸学院大学ヘッセル記念図書館においては、2013年度に開始した図書館のPR活動を行う「図書館サポーター」を契機として、図書館での学修活動を拡大している。2015年度からは「お昼の学生講座」の名称で、昼休み15分間で行う学生が講師となる試みを続けている。この学生講座は学生協働やピアサポートの要素を含みながら、講師役の学生にも聞き手にも高い学修効果が望める可能性がある。

キーワード：大学図書館 (university library) / 協働 (cooperation) / ピアサポート (peer support)

I. 序論

1. 大学図書館に求められること

大学図書館は図書館だけでなく情報センター、あるいは学修センターとしての機能が求められるようになって久しい。単に資料を用意する、レファレンスサービスを提供するというだけでなく、大学としての使命を果たすため様々な役割が期待されている。例えば、大学内での学びの「場所」を提供するとともにアクティブラーニングをはじめとする、新しい学修の形への対応が進められている。ここで言う学修とは、学習の意味も包含しつつ、より主体性を持って学び修めることを意味している。

大学には大きく分けて、研究と教育の機能がある。さらに近年では地域貢献も求められている。現在の状況を見れば、日本の多くの大学は教育機能を重視した大学であろう。従って大学図書館にとっても教育的な課題は、その中心関心となり得る。つまり大学図書館は大学が行う教育活動に対して受動的な図書館サービスを提供するだけでなく、より主体的な大学の教育カリキュラムへ

の連動と連携が必要なはずである。

2. ピアサポートとは

概ね1990年代後半から2000年代にかけて、ピアサポートという考え方が大学教育の中にも入ってきた¹。ピアサポートとは大ざっぱに言えば学生同士が教え合い、助け合うような仕組みのことである。例えばピアサポートの定義として「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称」といったものがある²。ピア、つまり同じ学生という立場での教え、教えられるという行為には様々なメリットが存在する。それは、もちろん教職員による教育や支援・サポートがある上での前提となるが、学生が誰かに「教える」という行為は、それ自体に極めて高い教育効果が期待される。教えるためには、自分自身が十分に理解していなければならない、さらに質問を受けることはより深い理解にもつながる。一方、教えるを請う学生の方も教員から教えるを受けるときとは、違った部分があると考えられる。その違いとして例をあげるならば、気兼ねなく教えることができる雰囲気だろう。そして、自分に近い視点からの教えるを受けることは、理解のしやすさに繋がることも考えられる。もちろんピアサポートは万能の薬ではないだろう、しかし教員による教育だけではない、様々

*¹ WAKASUGI, Ryouhei

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
図書館概論、情報技術論

*² IINO, Masako

北陸学院大学 ヘッセル記念図書館

な手段を大学が備えることは、今後ますます重要になってくると考えられる。ピアサポートは複雑化する、大学における学生の課題を解決するために導入されるようになった。従ってピアで行われるカウンセリングやチューター、メンターといった活動がピアサポートの範疇に入るとされている。

ただし、継続的なピアサポートを構築するのは難しいことも理解しておく必要はあるだろう。大学図書館を含む図書館のサービスを考えたとき、提供されるサービスの安定性は重要な要素だ。よく言えばワンポイント的な、悪く言えば場当たりので継続性のないサービスは、利用者を戸惑わせる原因になってしまう。大学図書館が大学教育の一部として、ピアサポートを取り入れることには、大きな意義があると考えられる。一方で大学図書館のサービスの一部としてピアサポートを取り込む際には、その継続性や安定性には十分に留意する必要があるだろう。

II. 北陸学院大学ヘッセル記念図書館における学生協働

1. 大学図書館活性化のための試み

北陸学院大学ヘッセル記念図書館（以下、ヘッセル記念図書館）では職員数の減少を受け、図書館活性化の新しい試みとしての、学生協働を展開している。ヘッセル記念図書館における取り組みの一つとして、図書館ボランティアがある。図書館ボランティアは、排架、資料装備等、図書館業務の補助を、司書の指示で学生が行うものである。いわゆる典型的なボランティア活動である。特にメンバーは固定されず、申し出があった学生にその都度、ボランティアとして活動してもらっている。

一方で新たに2013年度より開始された、「図書館サポーター」（以下、サポーター）は、従来司書が行っていた展示、掲示等のPR業務を学生に任せ、図書館のPRに特化した活動である。学生の視点で図書館利用の活性化を促してもらうことが狙いであり、サポーターとしてメンバーを募り、1年程度のスパンで活動を行っている。従って、ヘッセル記念図書館としては、本格的な学生協働の試みは2013年度に開始されたものであり、それほど歴史があるわけではない³。

この大学図書館の活性化のため、学生協働を行うという方向性は近年様々な大学で試みられている。さらにヘッセル記念図書館では、このサポーターを契機として、学生協働とピアサポートの要素が組み合わさった学生講座へと発展していくことになった。

2. 学生講座

ヘッセル記念図書館では、図書館運営委員会という制度をとっている。この制度は北陸学院大学及び北陸学院大学短期大学部の四学科（大学は幼児児童教育学科、社会学科、短大は食物栄養学科、コミュニティ文化学科）から、それぞれ教員が運営委員となり、図書館長及び司書が加わる形で委員会を形成している。

「お昼の学生講座」（以下、「学生講座」）の始まりは、2015年4月、幼児児童教育学科（以下、幼教）の図書館運営委員の教員が、学生を図書館に呼び込む方法を提案したところが発端となっている。それは、授業内で学生に出した課題作製の見本品と、図書館にある課題関係の本でコーナーを作って展示できないか、というものであった。館長の許可を得て、幼教1年『保育原理』課題の、泥だんごの現物と泥だんごの作り方の本を図書館入口付近で展示⁴した。なお、泥だんごの現物は前年度に学生が作製したものである。またその教員から、「泥だんごの作り方について、経験者である2年生から教えてもらう講座が開けないか」との提案があった。

さらに「学生講座」は、図書館のPR活動に特化した、サポーターの存在があつてこそ実現したとも言える。サポーターは2013年7月に活動を立ち上げて以来、2015年度は16名の学生がサポーターとして登録していた。図書館運営委員の教員の提案を受け、司書が泥だんご作製経験者の幼教2年生のサポーターに講師役を打診し1名から承諾を得て、「泥だんご講座」を開催することになった。この講座は講師であるサポーターの他、同級生の協力も得られ、土の調達など事前準備を行った。講座は、最初に簡単に作り方を図書館2階のライブラリー・ラーニング・コモンズ⁵（以下、LLC）で講義した後、図書館2階のテラスに出て実技を行う60分の講座となった。実施された日程

は2015年5月18日、22日の2回開催し、21名の参加があった。1年生にとっては課題の作製の、2年生にとっては「教える」ことそのものの、双方の学び合いがある講座で、学生が学生に教える有効性が認められるものであった。この「泥だんご講座」が「学生講座」の端緒となった。この講座は振り返ってみれば、「学生講座」のプレ講座と位置づけられるものだろう。

「泥だんご講座」後の2015年6月16日、「泥だんご講座」の講師とは別のサポーターの学生（幼教2年生）が、小学校の「生活科」の模擬授業（15分間）の資料が余ったと司書に雑談の中で話をした。この幼教2年生の学生は生活科の模擬授業について「もっとこうしたかった」という反省もあると述べていた。そのため、余った資料の有効活用や反省を活かした模擬授業をもう一度やってみないかと、司書側から声をかけた。具体的には全学生が参加可能な昼休みの15分間とし、場所を図書館2階のLLCでやってみてはと提案し、学生が「やってみようかな」と発言した時が「学生講座」の出発点であった。館長とサポーター顧問の図書館情報学の教員に報告し、良い企画であると了承を得て、幼教の生活科担当教員の賛同も得ることができた。また生活科担当教員から、講座の実施を大学教職員に知らせてはどうか、とアドバイスもらった。6月22日、2015年度第3回図書館運営委員会で報告し、企画、メール配信共了承を得て、6月25日開催としてメールを大学教職員全員に配信した。メール配信後、ある教員から、参加者に感想を書いてもらったなら、講師の学生にフィードバックできるのでと示唆を受け、A5サイズの感想の様式を作製した。以来、現在まで「学生講座」の講師に図書館が渡すのはこの感想のみであり、それ以外の金銭等の報酬はなく、まさしく学生の自主的な活動となっている。この点こそ、本学「学生講座」の独自な特徴である。2015年7月2日から、大学と同じキャンパスにある北陸学院の幼稚園（隣市の幼稚園も含む）と、小学校へも「学生講座」開講メールの一斉送信を開始した。

2015年6月25日12時45分、『がんばって作った成果、みんなに教えたいことをお昼休みに発表するイベント』をキャッチフレーズに、正式な第1

回の「学生講座」がスタートした。

幼教の学生は指導案を計画し、同級生の前で発表することにある程度慣れている。また模擬授業の振り返りから始まった経緯もあり、2015年度の講師は全て幼教の学生であった。小学校の教員採用試験の実技の度胸試しとして、模擬授業を行った幼教4年生もいる。その後2016年7月末までの開催は25講座、参加人数は274名に上った。表1にプレ講座及び「学生講座」の参加人数や時間などをまとめた。（学科名の略称として、大学の幼児児童教育学科を幼教、社会学科を社会、短大のコミュニティ文化学科をコミと表記した。）

図書館で「学生講座」を行うメリットは「誰でも参加できる」に尽きる。講師は「上級生と下級生」ではなく、「学生と学生」という立場である。また、図書館（＝全学生に開かれており、利害と最も関わりのない場所）で開催するという意味で、個人であろうと、グループであろうと、フラットである。これこそが、図書館で開催する意義ではないだろうか。講師の学生の一人は「誰もが参加できるからこそ緊張感がある。知り合いの学生以外の反応に達成感がある」と講師としての感想を述べている。また「学生講座」では、学生のみならず、教職員の受講者としての参加が多いのも特徴の一つである。「学生講座」への学生と教職員の参加者の比率は平均すると学生79%、教職員21%という割合になっている。ただし、講座によってかなり聴衆の比率は違っており比率を図1に示した。なお、幼稚園の保護者対象に行なった、17回及び23回は図から除外してある。

教職員にとっては、学生がどのような事に興味を持ち、何を学んでいるかを知ることのできる場ともなっている。ある講座では、講師の学生と講座に参加した教員との学び合いが見られた。2016年5月16日に開催した「板書の文字をきれいに書こう 黒板編」である。講師は幼教の3年生で、「ホワイトボード編」を2年生だった2016年1月12日に開講している。また学生は小学校教諭を目指しており、黒板の板書をいかに書くかを研究していた。この講座では、小学校教諭の経験がある教員が2名参加していた。講座を聞いていた学生から、「先生も板書してみてください」という声があがり、教員がフロアから黒板の前に立ち、

表1 「学生講座」実施状況の一覧

回	年	月/日	講師所属学年	テーマ	人数	時間	備考
プレ1	2015	5/18	幼教2	泥だんご講座	3	60分	
プレ2		5/22	幼教2	泥だんご講座	18	60分	
参加者計					21		

回	年	月/日	講師所属学年	テーマ	人数	時間	備考
1	2015	6/25	幼教2	白い線の謎	30	15分	
2		7/1	幼教2	僕のノート	9	15分	
3		7/9	幼教2	ホタルの光る謎	13	15分	
4		7/14	幼教2	パネルシアター実演	19	15分	
5		7/15	幼教2	楽しく生きるには	19	15分	
6		11/24	幼教1	1冊の絵本を二人で「読み聞かせ」	5	15分	
7		11/25	幼教2	ワークショップ 小さなリースを作ろう	23	15分	
8		12/8	幼教1	クリスマスや冬の絵本を読み聞かせ	9	15分	
9		12/9	幼教1	クリスマスや冬の絵本を読み聞かせ	12	15分	
10		12/17	幼教2	四角形を作ろう	9	15分	
11		12/18	幼教1	クリスマスの絵本を読み聞かせ	6	15分	
12	2016	1/12	幼教2	板書の文字をきれいに書こう ホワイトボード編	16	15分	
13		4/21	幼教4	算数の模擬授業(1あたり量・小2の掛け算の導入部分)	16	15分	
14		5/13	コミ1	ワークショップ カッターのできる切り絵でしおりを作ろう	6	15分	
15		5/16	幼教3	板書の文字をきれいに書こう 黒板編	17	15分	
16		5/24	コミ1	かんたんにかわいいイラストを描いてみよう	10	15分	
17		6/3	コミ1	ワークショップ カッターのできる切り絵でしおりを作ろう	7	45分	幼稚園保護者対象
18		6/15	幼教3	泥だんご講座	8	60分	
19		6/16	幼教3	泥だんご講座	4	60分	
20		6/16	幼教3	泥だんご講座	1	60分	
21		6/17	コミ1	ワークショップ カッターのできる切り絵でしおりを作ろう 金魚編	7	15分	
22		6/20	コミ1	かんたんにかわいいイラストを描いてみよう part.2 応用編	3	15分	
23		7/1	コミ1	ワークショップ カッターのできる切り絵でしおりを作ろう 金魚編	10	45分	幼稚園保護者対象
24		7/7	社会3	ワークショップ 英字新聞で手作りメモを作ろう	8	15分	
25		7/19	幼教3	社会科模擬授業 「信長の政策」	7	15分	
参加者計					274		

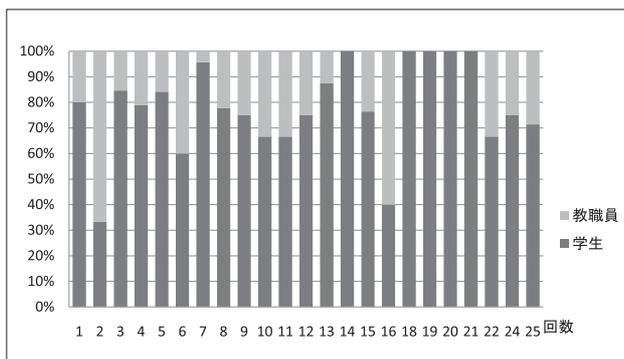


図1 学生と教職員の「学生講座」参加比率 n=257

チョークの持ち方、使い方を教えるという展開になった。これこそアクティブラーニングであり、わずか15分間で参加者の学びが深まる様子を見ることができた。

2年生で講師を経験した学生が、3年生でも講義してくれ、模擬授業の教え方の上達が分かるのも醍醐味の一つである。このように、一度講師を経験した学生が、再度講師を引き受ける例が多いと感じているが、「学生講座」の開講回数自体が

そこまで多くはないため、はっきりとしたことを言うことはできない。

また、2015年度は幼教の学生のみが講師だったが、2016年度から社会学科、コミュニティ文化学科の学生が講師を引き受けるようになった。このように他学科の学生講師の裾野を広げた契機が、ワークショップ形式の講座開催である。ワークショップの第一回目は2015年11月25日「小さなリースを作ろう～作ったリースのブローチをつけてツリー点灯式に行こう～」である。本学はキリスト教主義の大学であり、毎年クリスマスシーズンに杉の枝を採取し、リースやクランツを作製し、学内の飾り付けを行っている。「杉の枝が余っているが、学生講座で使えないか」と入試広報課の職員に声をかけてもらったことで、初めてのワークショップ開催が決まった。この職員は、大学のWebサイトやFacebookに掲載するために「学生講座」を取材しており、かねてから活動に理解を示していた。この職員を通して「学生講座」が地元新聞⁶の記事にもなった。また他の職員から、個人的に所持している道具（模様が抜けるパンチ、ピンキングはさみ）を借りてワークショップを開催したこともある。このように教職員を巻きこむことは、学内に認知を深めると共に、新たなアイデアを教職員から受け取る機会となっている。

ワークショップは自分の特技を披露できると、幼教以外の学生も講師を引き受けるようになり、新たな学生講師を発掘する契機ともなった。また、内容が学科により固定されがちな模擬授業より、他学科の学生が参加しやすい特徴があり、学科を超えた部活動やサークルの講座が開講されれば、更に参加者が増加すると思われる。

今後の「学生講座」の展望として特に象徴的なのは、大学と同じキャンパス内にある北陸学院第一幼稚園の保護者の「学生講座」参加の事例である。コミュニティ文化学科1年生のサポーターと司書との会話で、その学生がデザインカッターで切り絵を作る特技があると判明した。早速、ワークショップ形式の「学生講座」開催を打診したところ、目の届く範囲が10名程度とのことで、人数限定をした上で講座を開くこととなった。そのため、デザインカッターを100円ショップで10本購入し、学生とサポーター顧問の教員と相談しながら、

15分で完成させるために型紙を用意した。さらに、完成した切り絵にはラミネートをかけることとして、名刺大の葉作製のワークショップという形で講座を開催することになった。北陸学院内にメールを配信したところ、同じキャンパスの北陸学院第一幼稚園のお迎え（午後2時）前の保護者も参加できないかと幼稚園副園長から問い合わせがあった。この時は学生の参加者を優先し、さらに時間も合わなかったため、昼休みの「学生講座」に保護者が参加することはなかった。そこで、講師役の学生とも相談し、改めて「学生講座」を45分の拡大版とし、「保護者対象学生講座」の形で開催することができた。終了時に保護者に感想を書いてもらったが、「子育て中に何かを作製する機会がなかったので、とても新鮮で楽しかった」「非日常なひとときを過ごす事が出来、リフレッシュ出来ました」「育児ばかりしていたので、自分の時間を楽しめました」と好評で、また学生同士の感想とは違う内容が見受けられ、主催者としての図書館にも参考になり、学生にとっても励みになったようである。これからは参加者を学内だけに限定せずに広げていき、ひいては地域に貢献できる方向性もあるのではないかと考えている。

ワークショップの場合、材料や道具を用意する必要があり、定員を設ける場合が多い。「学生講座」の参加人数が定員に満たず、用意したが材料が余った場合や、あるいは学生が作ったイラスト講座資料のチラシ等をカウンター横にコーナーを設け、配布を始めた。その配布物を見た学生が、この講座に行きたかったという感想を漏らすこともあり、継続していけば参加者は増加していくと予測している。

Ⅲ. 図書館で学生講座や学生活動を行う意義

1. 大学図書館における学修

大学図書館は大学に通うすべての学生、そして教職員が利用する施設である。どうしても学生は学科という枠の中で動く場合が多い。これにより同じカリキュラムを学ぶ学生同士の交流が増えるのは当然ことであり、問題があるわけではない。しかし、できれば同じ大学に通うものとして相互交流や相互理解が深まることも望ましいだろう。そこで、大学図書館の学部学科を越えた利用とい

う特徴が極めて重要になってくる。

大学図書館で学生講座を提供すると言うことは、学部学科の枠を越えた参加を呼びかけやすい。もちろん、現状の課題として例えば幼教の学生が講義を行えば、それを聞いている学生も同じく幼教の学生であるケースが多い。ただ、可能性としては、どの学科の学生が講座を行っても全ての学生が興味を持ってくれるようなあり方は十分にあると考えている。実際に少数ではあるが、学科を越えた繋がりや形成されつつあるように見受けられる。

もう一つ、大学図書館が学生講座を行うメリットとして、図書館資料と講座内容の繋がりを利用できる点がある。例えば読み聞かせであれば、その使用した絵本や同じ作家の絵本を用意し、講座内容に合わせた図書館資料を準備することによって、学びをより深めることもできるだろう。

2. 一般的なピアサポートとの違い

一般的な大学におけるピアサポートのあり方は、ピアカウンセリングや学習相談のような形式をとっていることが多い。これは教える側にとっては、人に教えることにより理解が深まる、といったメリットがあるとことはすでに指摘した。その意味で、学生講座も狙っている点は同じである。しかし多くのピアサポートはマイナス状況へ至らないため、あるいはマイナスの状況にある学生を助けるため、といった援助の側面があることも否めないだろう。もちろん、こういった援助は確実に必要であるが、ヘッセル記念図書館で行っている学生講座は、そういった援助という側面は極めて薄い。例えば、学生講座は1対1で行われるわけではない。人数の差はあるものの、常に講師役の学生1ないし2に複数名の受講者がいるという形式である。つまり1対1で必要とされるコミュニケーションとは違った、発表を行う、ある程度の人数がいる場をコントロールするというスキルが鍛えられることになる。つまりフォーカスが当たっているのは、講座を聴く学生よりも、講座を行う学生の方により指向していると言える。このような学生講座では、いわゆるプレゼンテーション能力の部分や育てる、というメリットも存在する。さらに、この学生講座は授業の課題として行うわ

けではない。つまり学生がやりたいと思わない限り講師役になることはない。それは、学生講座をするということを学生が決意して講座の申し込みをする、という行為自体が、相当に前向きでやる気がないと不可能なのだ。もちろん、教職員からの勧誘で学生講座を行うことを考える場合も現状では非常に多い。それでも、直接的には成績や単位に結びつかない学生講座は強制されて行う類のものではない。実際に友人が学生講座の講師役になった姿を見て、自らも講師になりたいと申し出てきた学生は存在している。これは僅かな兆候かも知れないが、学生が学生自身を高めるといい、良いスパイラル効果が望めるように思われる。

そして、この自主性やモチベーションがないと続けることが困難な学生講座が1年以上、相当な開催数で継続できていることは十分に評価できるのではないだろうか。

IV. 結論と課題

これまで述べてきたように、大学図書館における学生講座という試みは、まだ開始から1年足らずである。しかし、今後の展開にも希望が持てると考えている。それと同時に幾つかの課題も浮かび上がってきている。

最も大きな問題は今後どのように学生講座を中心とする学生協働を継続していけるかである。今までどのような要因が継続を支えてきたか見直すと、サポーターが最初期の講師を務めてくれたことから、活動が始まった経緯がある。そのため、最初からサポーター顧問の教員、各学科の教員や館長と相談しながら進めることができた点である。つまり教職員の協働がある程度、上手く行ったからこそだと考えられる。大学の学科構成も影響があっただろう。幼教では教員養成を行っており、そのため教案を作る授業がある。そういった教育系の学科があったことが、学生講座の「ネタ」となっており、幸運であった。さらに15分間という時間設定も、講師の学生にとって負担がない時間のようにあり、学生が講師役となる際のハードルを適度に引き下げているのではないだろうか。

継続のために、最も重要な点は「学生講座の講師」の発掘にかかっていると考えるだろう。2015年7月17日から、継続した企画を目指して「お昼

の学生講座申込表」をヘッセル記念図書館のカウンターに用意し、興味を示した学生に司書が声をかけて勧誘している。学生の申し込みテーマをみると、恐らく「ゲーム」によって興味を得たものと推察されるようなテーマも出てきている。そのような内容であれば、いくらでも語れると申し込んでくれた学生もいるのである。そういった、学生が持つ「こだわり」「得意な領域」の発掘こそが、継続の鍵となるのではないだろうか。利用者の声を直接聞くことができるカウンター業務は司書にとって、図書館業務の中で最も重要だと考えられてきた。実際に、カウンターで利用者に対応できるからこそ学生講座の発想に結実したと言える。いかに「学生をその気にさせることが出来るか」という部分について、今まではカウンターの司書が主にその役を担ってきたが、並行して他の方法を模索していかなければならないと考えている。例えばより積極的な大学の科目・カリキュラムとの連動・連携が有効なのではないだろうか。学生講座によって図書館も司書も、資料の見直し、レファレンス・インタビューの能力向上等、学生に育てられている。普段教える側が教えられる、教えられる側が教えるといった、双方向の関係が、学生間だけでなく、学生と図書館の間にも生まれているといえるだろう。

次に、ワークショップ形式の学生講座の実施については、新たな予算を使わずにいかに工夫するか、という視点も重要である。人的資源や金銭的な問題というのは、もはやどの図書館でも抱える一般的な問題である。しかし、予算を掛けずとも、図書館で廃棄する英字新聞や保存期間が過ぎた雑誌のリサイクル等、材料を学生に提示することはできるはずだ。そこから、学生自身が新たな講座を企画してもらうことも、有効な方法の一つだと考えている。

また、今までやってきたことの振り返りの必要もでてきている。本稿は、図書館・司書や教員サイドからのまとめになっているが、講師の学生自身が何を得て、何に気付いたかについて、総括が行われていない。今後は、学生へのインタビューあるいは学生自身による文章の形でのまとめなどが必要になるだろう。そういった総括から、更に課題や問題点を洗いなおすことができるのではな

いかと考えている。総括や振り返りを働きかけることは、学生講座をやりっ放しにしないことに繋がる。さらに学生が講師として繰り返し参加し、定着してくれることにも、繋がるのではないだろうか。また、講座をただで終わるのではなく、図書館所蔵の関係資料を紹介する学生講座コーナーを LLC 内に作り、学生講座と資料を結びつけ図書館で開催することのメリットを生かすことも考えていけるはずである。

ヘッセル記念図書館の外部へ視点を向ければ、広報と学内における認識も課題である。「誰もが参加できる」がモットーである大学図書館は、発表の「場」として、全ての学生に開かれている。その「場」をいかに利用してもらうか、PRの方法も再考の余地があるのではないだろうか。2015年11月19日より、学生全員に対して学生講座開催の一斉メールの配信を開始している。メールの一斉配信である程度の学生には認知されているだろうが、全ての学生が丁寧にメールの中身を確認してくれている訳ではない。そのため、さらに他の方法も模索し続ける必要がある。例えば、講師の学生に承諾を得て、図書館内で学生講座の写真を掲示し、あるいは映像を放映することにより、講師になることのハードルの低さをPRするといったことも考えられる。

北陸学院は幼稚園から大学まで、連続的な学びを提供している。特に幼稚園は北陸学院第一幼稚園が北陸学院大学と同じキャンパスに立地しており、連携が図りやすい。そこから、学生講座の派生として幼稚園保護者対象の講座が開かれたように、大学内だけではなく学内外に学びの輪を広げることも可能である。そういった学外への広がり、学生の意欲向上にも資するのではないだろうか。

最後に講座の名称を通じて、今後の希望を述べておきたい。「お昼の学生講座」という名称は、当初あるサポーターが「毎週お昼の学生講座」と名付けてくれたことから始まった。しかし名称に含まれる「毎週」を実現することは想像以上にハードルが高く、2015年11月20日から、「毎週」を外して「お昼の学生講座」と名称を変えた経緯がある。しかし、もちろん理想としては「毎週お昼の学生講座」である。今後の目標として、ヘッセル

記念図書館では「毎週お昼」に「学生講座」が開催されている、それが当たり前であるという光景を目指していきたい。

〈注・引用文献〉

- ¹ 山田剛史. ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性. 大学と学生. 2010, no.87, p.6-15.
- ² 西山久子. 実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向ーピアサポート／仲間支援活動の起源から現在まで. 岡山大学教育実践総合センター紀要. 2002, vol.2, p.81-93.
- ³ 若杉亮平, 飯野昌子. 北陸学院大学ヘッセル記念図書館における学生協働ー学生図書館サポーターの活動を中心にー. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, 2015, no.8, 337-344.
- ⁴ 2015年度第1回図書館運営委員会(2015年4月21日)でコーナー設置を報告
- ⁵ 2014年12月に図書館2階の什器を入れ替え、運用開始
- ⁶ 昼休み学生が「講座」『北國新聞』2016年6月4日(土)朝刊26面

〈参考文献〉

- 日高友江, 岡田隆. 学生協働 (Library Assistant) によって変わる図書館サービス: 山口大学図書館の実践. 大学図書館研究. 2009, vol.87, p.9-14.
- 吉田博ほか. 大学図書館で実施する学習支援の成果と課題ーStudy Support Spaceの実践からー. 大学教育研究ジャーナル. 2014, vol.11, p.26-37.